



内視鏡を使った肺がん手術で、肺の切除を行う。スタッフ＝松江市上乃木5丁目、国立病院機構松江病院

山陰中央新報

1月10日(水)

はつらつ
SUN-IN
創刊125年

発行所

山陰中央新報社
松江市殿町383 山陰中央ビル6階
郵便番号 690-8668
電話 総合案内 0852(32)3440
©山陰中央新報社2007

山陰初 1300例突破 自然気胸、肺がん治療で

国立病院機構松江病院

国立病院機構松江病院(松江市上乃木五丁目)の胸腔鏡手術の通算件数が、千三百例を突破した。山陰両県の病院では初めて。この術法は体への負担の軽さなどから注目されているだけに、同病院では今後も一層の高度化、専門化を図っていくことにしている。

同手術は小型カメラ(内視鏡)を胸腔内に入れ、テレビモニターに映される画面を見ながら器具を操作。体の側面に二、三センチの穴を三カ所程度開けて行う。

開胸手術に比べて手術に伴う傷跡や術後の痛みが少なく、機能回復や入院期間も短いメリットがある。

広がる

胸腔鏡手術

体の負担少なく 早期回復も利点

る。ただ、病変部に触れることができないため、高度な技術を要するとされる。

松江病院は、もともと呼吸器系疾患の治療に力を注いできたこともあり一九九二年、山陰で初めて胸腔鏡手術を実施。以降、この分野の人的資源や設備の充実を図り、一昨年六月には呼吸器病センターも開設した。

千三百例を症例別に分けると、自然気胸が最も多く全体の40%以上。二番目は肺がんで全体の約30%。三番目には肺腫瘍(しゅよう)が15%で続いている。

同病院の中井敷院長は「胸腔鏡手術は高度な技術を要するが、メリットが大きいので、さまざまな面で研さんを重ねつつ、患者さんに適応すれば積極的に行っていきたい」と話している。